



櫛  
の  
木  
久



桃のおく

芭蕉翁二十五ヶ條口受



俳諧はなるといふ事

一或人問曰俳諧ハ何ヲ為ス否ト云々ト云ヤ答曰俗談平話  
と云々云々多ク也

俳諧ハ俗談平話中ニテ鄙言俚談と云々云々といふ事  
世ノ流俗言事云々云々といふハ津陽院時ノ頃也俗中ノ俗  
事ハ是をいふ事と言也古式ハ古時ノ人各各ノ家業  
ノ和事ヲおもはせしむ事云々といふハけさなる連歌ハ板川  
有りと云々云々俳諧ハ二十ヶ條云々云々

又別說傳の事と云ふ可也何ぞ佛なるに連てある佛なる  
よの事ある事なきの事有と云はれざる<sup>可</sup>然るに佛傳ある事と  
かゝることと云ふ時なる事<sup>及</sup>逆てなる事なる理とすれども  
佛傳の姿ハ取違ひの事なる事ハ向上一路に在りし  
口傳其れ法獲麟し秘文并一向宗なる事

是より佛傳の事と云ふ可也何ぞ佛なるに連てある佛なる  
よの事ある事なきの事有と云はれざる<sup>可</sup>然るに佛傳ある事と  
かゝることと云ふ時なる事<sup>及</sup>逆てなる事なる理とすれども  
佛傳の姿ハ取違ひの事なる事ハ向上一路に在りし  
口傳其れ法獲麟し秘文并一向宗なる事

是易經大中止といふ事一 禪心といふ事  
の世の理解義解の事解を在る事一 法ある事なる  
見性なる人の此の法なる事なる事

獲麟心法の内

周魯ともふ事不付魯西の事一 禪と獲麟とは哀  
る世として禪の事なる事不付て抄録すれしる事ハ  
其れ材の事なる事と云ふ事不付と云ふ禪と獲麟とは  
其れ人にして言ハその事なる事不付と云ふ事ハ  
其れ事と云ふ事なる事不付と云ふ事ハ  
其れ事と云ふ事なる事不付と云ふ事ハ  
其れ事と云ふ事なる事不付と云ふ事ハ



石井くまのまきくせよ坊う毒 翁  
源氏陽炎たき 障のちのたゆらひまに福をて

とう世つきまきぬ天にうつよ

但そこらそ 猪人ひと 竹西のあめ

けす和歌のちるたせに

口伝連 歌のり

昔らとてし路のときも目をみて服あはえさし心平  
おもひえをてあさるえぬるし権量に目をえてゆると  
心よきと自他の境 悟染の遠めあり  
名くすまなけあめうんひす

根くハ陸のあつのおり水こそ

是ハ抑もふをうらむ情こ又染まそいそ

俳諧 名くすまなけ 虫ハ 以る

十たもまき 残るよおれのまき

右ハ二十五條大意也 余ハ合巻の内其知ころあつ仍  
て安ふ田名ん

貴丈數年當門之徘徊  
執心厚ク先師完來翁之  
旧文より心亭世度傳書十  
三部悉令傳授早和家  
三神と掛奉り亭櫻と他見  
他言多し九い名去書家  
執心の人よおれ之書を風流深

雪中菴

嵐雪

雪中菴

吏登

雪中菴

葵太

雪中菴

完來

切以礼之上降属一の君之依る  
奥多如件

五世雪冲庵

美山

文政五壬午年春二月

首白の巻尾

十七ヶ条接ち

廿四句の事

廿四句ハ言を名取らうと一人名を起す是を起とす  
人名取るとハ物申す一物多くとハ物少く花月と題  
向ふ起る是より白の句位を添へて是ハ其定むる也  
有故

又如く双九官を社地ハ海をこわりて之を田と云ふ  
多き初花と云ふ物をもよひて是動きて世なるも成る  
し是より人名取る意ハ境をてぬる句を海と云ふも也  
於此其意を正すは是より白の句位の上より其意を  
考へしむ

序の曲







仔細云々

細いを下りてまたまたの  
とのももしちのちのちのちのち

時侯 景色 向方 迎方 心方 御音 定取 持え 句

以上

雪の枝折に合しけしハ田名ス

